

ヘラクレイトス断片三六について

比較論的考察

丸野 稔

以下においてとりあつかうヘラクレイトスの言葉は、

「魂(プシューカイ)にとって水になることは死であり、水にとつて土になることは死である。土から水が生じ、水から魂(プシューケー)が生ずる。」(ディールス・クランツ断片三六)

ヘラクレイトスには魂(プシューケー、または複数形プシューカイ)という語をもちいた断章がほかに九種類ほど伝えられているが、右の言葉はその語を水や土といった自然的元素の転化のなかにもちこんだ独特なもので、これをどう解釈するか研究者のあいだで意見がわかれている。ここではまずウェストの比較論的研究を検討しておきたい。

一 古ウパニシャッドとの対応

ウェストは新しい比較論的研究をまとめた『初期ギリシア哲学

と東方』⁽¹⁾のなかで、断片三六を古ウパニシャッドにあらわれた思想と対応させている。『カウシータキ』一・二によれば、「誰でもこの世を去ると、月へおもむく。月は前半月のあいだそれらの者の生氣(フラーナ)によって肥え太り、後半月のあいだにそれらの者を再生させる。月はじつに天界への入口なのである。月は自己の問いに答えられた者を天上へ通してやるが、答えられない者は雨となり、月はそれらを地上に降らせる。こうしてそれらの者はふたたびこの地上のさまざまな場所に、それぞれの前世の所業と知識に應じて、蛆、蛾、魚、鳥、獅子、猪、犀、あるいは人間やその他の生きものに生まれかわる」。いうまでもなく月下の世界における輪廻を説いたものである。これと同じ考え方は最古のウパニシャッドといわれる『プリハド・アーラニヤカ』(六・二・一三〜一五)にもくわしく説かれているが、いま『チャーイン

「ドーギヤ」五・一〇・五、六によって上の引用を補えば、死者は月に一定期間とどまったのち、来たときと同じ経路をへて虚空にもどり、風↓煙↓霧↓雲↓雨となって地上に降下する。そして米麦、草木、大豆等として生ずると、これを食した者のなかで精液となり、さらに母胎に注ぎこまれてふたたび生きものとして生まれてくる。ウエストはここにヘラクレイトスの言葉と対応する文脈を見いだしているのである。

対応が正確にはどのようなかたちで確認されるか、しかしむずかしい点がのこっている。おそらく次の二つの場合を考えることができるだろう。

i 魂↓水↓土 雨となって地上に降下する過程(A)

魂↑水↑土 反対にひとが死んで月へいたる過程(B)

ii 魂↓水↓土 雨となって地上に降下し植物をへてひとの肉体にはいる過程(A')

土↓水↓魂 ひとの肉体のなかで精液にかわって新しい生命へと注入される過程(A'')

i は月からの下降(A)が月への上昇過程(B)を逆方向にくりかえしたもので、魂↓水↓土の下降と上昇の区別をよくあらわしている。ウエストはiiの対応を考えているようである。土は肉体を、水は精液を意味する。これによれば全過程は、父(魂↓水)↓私

(土↓水)↓子(魂)という三代の転生の輪を形成することになる。彼は別の断片二〇「生まれてくると、ひとは生きてゆくことをのぞむが、それはまた死を待つことでもあり、そして子供をあとにのこして、また彼らを死にいたらしめる」から世代の交替をとらえ、その基本的な構図を断片三六にみたわけである。

ウエストの解釈のうち魂↓水↓土の過程(A')については、いくつかの有効な示唆がえられる。水が自然現象として雨を表象し、また人間の事象において精液をもあらわしうることは、たとえば天地分裂の神話を思いおこせばいいだろう。天の降らす雨によって大地が豊饒になり万物を産みだすという考え方と、ヘラクレイトスの言葉とはけっして無関係でない。魂を水や土といった自然的元素の転化のなかにもちこんだひとつの理由も、そのへんにあるかと思われる。また、転生において精液のはたす役割は具象的かつ重要でウバニシャッドによくうかがわれるが(草木の液汁もそれにふくまれるか?)、ギリシア人もその点に注目しないはずはなかった。ヘラクレイトスはそれとはっきり語ったわけでないが、魂にとって湿めることの生理的・倫理的な意味を強調している。「魂にとって湿めることは悦びもしくは死」(断片七七)、「大人でも酔えば少年に手を引かれてゆく。どっちへゆくのかもわからずに千鳥足で歩かし、湿った魂をもっているのだ」(断片一一七)、同様に「欲情にさからうのはむずかしい。それは欲しいものを手にいれるために魂を代価にする」(断片八五)。これらの言葉は、湿

気が魂の頽落を象徴することを言いあらわしている。魂の精液への転位が死の代価を必然的にもない、人間の本来的生からして下降線をたどることになるといふ烟眼は重要である。有名な「人間の（魂をみちびく）ダイモン」とはそのひとの生き方（エートス）なのだ（断片一九）という簡潔な表現も、「前世の所業（カルマ）に応じて生まれかわる」と説かれたウパニシャッドの文脈からよく理解できるもので、魂の頽落にたいする警告といふべきだろう。さらに、ウパニシャッドの月下の世界とよく比較しうる点であるが、ヘラクレイトスは月を太陽より下方のより不純な領域にあるとみなし、月下の世界を禍害にみちたところと考えていたようである。

こうした細部にわたる対応に着眼したにもかかわらず、ウェストは月から雨となつて地上におちる過程が月へ上昇する過程を逆方向にくりかえすという点を見おとしている。土↓水↓魂の過程を、彼は雨によつて生育した植物を食した人間が精液を子宮へと放出し、子供を生みだすことと考えたが（A）、この解釈には上昇と下降の相反性もちうる積極の意味づけはみられない。ヘラクレイトスの語法で、魂から土へいたる過程だけが「死」（タナトス）と表現されていることにあらためて注意すべきであろう。

土から魂へいたる逆の過程はそれとはっきり区別されているのである。ヘラクレイトスはいまさらかに意識的に二つの過程を、ウパニシャッドのそれと同様に（A B）、転倒させている。このほとん

ど自動的な転倒の語法によつて真実を語りだすためには、ひとつにそれぞれの過程へ分離されてゆく意味の差異があるはずであり、いまひとつに、魂が自然的元素の転化にくみいられるだけの意味のひろがりをもつてでなければならぬ。後者については雨や湿気として一部見てきたが、さらにまた魂は蒸発物とも受けとられ、「魂は湿つたものから蒸発する」（断片二二）という説もヘラクレイトスに帰せられている。蒸発物は湿気をおびて降下するが、乾くにしたがつて上昇し、大気中の霧や雲となる。自然現象としては風や大気そのものでもあるだろう。蒸発物（アナテューミアーシス）という用語を彼がつかつたかどうか不明だが、二つの過程を下降と上昇の相反する方向において理解するためには有益な証言である。上昇過程はしたがって湿と反対の乾の過程としてとらえることができ、この方向の最後にあらわれる魂は乾いた魂でなければならぬ。

ウパニシャッドの文脈を利用しながらヘラクレイトスの言葉の可能性の意味が明らかにされてきたと思われる。のこされた問題は上昇過程の最後に語られている魂をどのような位相的差異において理解すべきかという点である。

二 クレメンスの報告

断片三六の報告者はアレクサンドリアのクレメンスである。すでに古くなったかもしれない分析の対象をいまあらためてとりあ

げ、学説誌を再検討してみよう。問題の一節をすこしまえから引用すると、「オルフェウスのつくった詩のなかには、『水は魂にとつて死である……。水から土が、土からふたたび水が生ずる。その水から魂はアイテール全体へと跳り出てゆくのだ』とあるが、ヘラクレイトスはこの詩句から自分の言葉をくみまてて、『……断片三六……』と書いて⁽¹⁰⁾いる。この報告はヘラクレイトスの言葉がオルフェウス詩の語句とそのまま一致していることを示すものであり、とくに水↓魂の対応する部分に興味ぶかい示唆をふくむ。さきの乾いた魂の方向にあたる。もちろん今日では右のオルフェウス詩がヘラクレイトス以前に成立していたことを積極的に主張する者はいないだろう。ただし、アリストテレスもオルフェウス詩の一節を「魂は風にはこぼれて……全体から(肉体の)なかへはいって⁽¹²⁾くる」と伝えており、この全体をアイテール全体と同定することは可能であると思われる。すくなくとも前四世紀までには、アイテールを受肉以前の魂のすみかとする思想がオルフェウス詩のなかにあったことは否定できない。たとえそれらの証言が前四世紀をどれほど遡りうるか不明であるとしても、乾いた魂の方向が月下の世界より上にある純粋なアイテールの領域を指し示していることは重要である。クレメンスはこの一節で地水火風のいわゆる四根の説にもふれているので、一方ではヘラクレイトスの言葉を自然的元素の交替説として理解したようにもみえる。たしかに水と土の交替や乾湿で説明できる転化は自然哲学的

ともいえるが、ヘラクレイトスはそれらの用語をもちいながらそれ以上のことを語ろうとしたのではないか。

彼の語法にもういちど注意してみよう。最初と最後にそれぞれ複数と単数の魂がつかわれていた。カーンはこの用語のちがいに注目し、下降して水になる複数の魂は個々人の魂ないし息を指すと考え、それは民間信仰にあるように、ひとが死ぬと肉体をはなれ亡霊となって地下の世界へ下るもので、人間の魂たちのハデス行というホメロスの構図を元素的な水と土への下り道におきかえてみせたと説明する。なるほど水と土になることは死を意味するために使われることもあり、『イリアス』七・九九、自然的元素への帰化によって魂の転生を語ることもあるていど可能であったかもしれない。そのかぎりでは、自然的転化のなかに魂を積分したという解釈にもうなずけるのである。しかし水から生ずる単数の魂を、カーンは元素が集合的に単数であらわされるのと同じ語法とみなしたが、はたしてどうか。これによれば、宇宙論を人間的原理に収斂させたというよりもむしろ、生死までも自然の過程に吸収させたということにならないだろうか。ヘラクレイトスの言葉がそのような意味を一方においてもちうることはこれまでにも見たとおりであるが、それを超えた意味づけが同時に語りだされている点をいま問題にしなければならぬのである。私は単数の魂を、文法的範疇からいえば、配分的なそれと考えたい。より正確にいうためには排他的単数とよぶべきであろうか。下降と上昇

の過程にあらわれた位相のちがいは、一方において複数の魂と同格になって転生がくりかえされると同時に、それを越えた方向をひらいている。カーンの解釈は転生の輪のなかに両者をとじこめる結果になると思われ⁽¹⁴⁾る。

月下の世界における生と死の交替を転生の輪とするならば、そこからの脱出として考えうる方向は完全に乾いた魂の定位によるほかない。これはもちろん信仰というよりは哲学的確信というべきであろうが、断片三六のなかのひとつひとつの言葉に意味をあたえているヘラクレイトスの思想もそこに根があるといわねばならない。密接に関連する言葉に、「乾いた魂、それは光輝⁽¹⁵⁾であり、このうえなく知的ですぐれている」(断片一一八)というのがある。単数の魂が「このうえなく知的な」(ソフォター)と形容される乾いた魂と直接につながりうると私は考えている。これは個々の魂をこえて共通の世界にあり、要するに、一なる知(ト・ソフォ⁽¹⁶⁾)を所有するものにほかならない。クレメンスの報告をもうひとつ引用すれば、「知はただひとつ、ゼウスの名で語られることをのぞみもし、のぞみもしない」(断片三三)。この引用のすぐまえにアイスキュロスから「ゼウスはアイテールであり、大地であり、天空である。ゼウスは万物であり、かつ万物をこえている」という一節が引かれているが、ヘラクレイトスはこのようなゼウスの名にあたひするものこそ一なる知であると考えたのであろう。もちろんこれは神的な知として、人間的なそれとはっきり区別さ

れるべきであって、魂の転生をこえたところから転生の真相を知悉する哲学的確信ともいえる。

断片三六の枠をあまりはみ出さないように注意してきたが、結局はその背後にまでまわらなければならぬ。ヘラクレイトスにとつて、「魂の限界はどの道をどこまで行つてもなかなか見つからない。それほど深いロゴスを魂はもっているのだ」(断片四五)。だからこれまでのところで見いだされてきた魂の位相は、あるいはその限界をきわめたものでないかもしれないが、しかしひとつの可能性を示していることは確かであろう。この位相がなければ、魂の転生を如実に簡潔な言葉で語りだすことは不可能なのである。はじめに述べたように、断片三六の基本的な意味は魂の転生を水や土という自然的元素の転化をとおして語っているところに直接にあらわれており、そのかぎりで魂は蒸発物として雲や大気でもありうる。ここには魂に自然的と人間的との両義がふくまれている⁽¹⁸⁾。魂の転生をたんに自然的転化と理解することも、あるいはもつぱら世代交替のように理解することも、いずれも一面的であると言わねばならない。また、カーンは乾いた魂の光輝を語った断片一一八に転生からの脱出の思想をみとめているが、それは断片三六が語ろうとしている最も重要な点であることも強調しておきたい。ウパニシャッドのような梵我一如の根本原理をヘラクレイトスの文脈にもとめることはゆきすぎであるかもしれない。むしろ彼は自然のなかにかくされた魂の真理を語っていると思われ⁽¹⁹⁾る。

(1) M. L. West, *Early Greek Philosophy and the Orient*, 1971.

ラクレイトスに於ては第四～六章の全体は、ラクレイトス自身の言葉のなかで相互の関連性を確定したあと、さらに古代ペルシア宗教やインド思想との比較から類似した文脈をめぐっている。ウヘストの方法は歴史的影響関係を積極的（積極的）にみとめようとするところに特色があるが、その点にさして Ch. H. Kahn, *The art and thought of Heraclitus*, 1979, pp. 297~302 (Appendix III: Heraclitus and the Orient, apropos of a recent book by M. L. West) など、たとえばラクレイトスがペルシアのゾロアスター教の何を受けとったかというふうな受容史の実証的裏づけは不可能であり、比較の唯一の可能性としてのこざれている方法はテクニクのうえの相互類似性を説明することではしかないとする。私はこの論文で一方の理解に有効な文脈を他方があたえるところまで比較をせよ。

(2) 古ウパニシャッドの成立年代については、中村元『初期のヴェーダーンタ哲学』一九八一再刊、四六～五五ページ参照。

(3) *op. cit.*, p. 186.

(4) ウェストの別の論文、矢内光一訳『ギリシア悲劇詩人における宇宙論』思想六八五号、一九八一・七、五三ページ以下参照。

(5) ストアのゼノンの説に、人間の放出する精液（*Sperma*）は湿気をおびた「ネウマ」で、魂の一部であるところ（*Artus Didymus fr. phys.* 39, 1 Diels, *Dox.* 470^a）前五世紀のヒッポクラテス（*Hippolytus*, *Ref. omn. haer.* I, 16, *Dox.* 566^b）湿気が生成に寄って重要な役割をはたすことはアタクメンドロスの生物発生論にもあったように、生きものはじめ湿ったもののうちに生じ……年月をくってから乾いたものの上におがって来た」とその意見が伝えられ（*Aetius* V, 19, 4, *Dox.* 430^a）は「プラトンの」精液は脊椎

のなかに流れ子を産もうとする愛欲の原動力になる（*Tim.* 91B）⁶。醜陋は精液をまく（*Spermatelonein*）のなでたらめではまきこころなく（*Leg.* 775D）と見た見解も参照。

(6) 「*φθίσκειν*」のこの語を削除する読みも多々。報告者のヘルメリスは「死でない……悦びとは誕生へ変わる」と説明する（*Porphyrius*, *de antro nymph.* 10^a）断片二十六との関連を考慮し「*φθίσκειν*」を削除する必要がある。⁷

(7) *Theophrastus apud Diog. Laert.* IX, 10, *Hippol.* *Ref.* I, 4.3.

(8) *Philo*, *de aet. mundi* 21 「死とは、まづたく消滅してしまつて、*φθίσκειν*」別の元素への転化を指し「*φθίσκειν*」という説明はあまりに自然哲学。cf. *Bollack-Wismann*, *hécatrite ou la séparation*, 1972, p. 146.

(9) *Arist.* *de anima*, 405a26.

(10) *Clemens*, *Stromateis* VI, 17 (G. Dindorf, *Clementis Alexandrini opera* III, p. 138).

(11) しかし引用されたオルフェウス詩をストア派以降の作とみなすことにはいくつかの反証が出される。ウェストはその詩句がむしろ、ラクレイトスをモデルにしたストア派以前のヘラクレイトス主義者の手になるものである（*Op.* 151）。また、一九六二年に発見されたテルヴェニ・ペギオニス（前四世紀）の一部には「*Αιθαίρη*と跳り出した」という一句が万物の創造者ゼウスについて語られていて（第九編）「跳り出す」の語法はちがいが（*D. aithéra ékthore*, *Cl. hólon aithéra anaissonas cod. L., em. Bywater*）⁸類似した考え方がみられるのは注目である。⁹

(12) *Arist.* *de an.* 410b29~30.

(13) *op. cit.*, p. 238.

- (14) 従来多くの研究者は断片三六を断片三一「火の换位。はじめは海
 海の半分は土、あとの半分は雷光」と近づけ、魂の転生を火の転化
 との類比から理解した。カーンは魂を火と同定することの誤りを指
 摘しているが、結果的には同じ困難に陥るのではないか。カークは
 断片三一から火と海と土の転化を再構成したが (G. S. Kirk,
 Heraclitus 'The cosmic fragments, 1954, p. 332)、『ヘラクレイテ
 スは火の転化を語っているわけでない。対応としては雷光 (Gräster)
 と蒸発した魂とを考えるべきである。なお鈴木照雄『ギリシア思
 想論攷』一九八二、一二五ページのよつに、「原火」という考えを方
 からすれば、それは「じねに生きてゐる」(断片三〇)のであるか
 ら魂もやはり火質の本性を具有する。
- (15) ホラック・ヴィスマン、カーンとよつに *auge xere psyché* と読
 ら。
- (16) Chem. Strom. V. 115 (Dindorf, III, p. 95).
- (17) *ib.* 114, fr. 70 Nauck (fr. 105 Mette).
- (18) 「アナクシメネス」われわれの魂は空気であつてわれわれを統御し
 てゐるよつに、世界全体も氣息すなわち空気が包んでゐる」(断片
 一)も参照。『シノーケー』『ネウマ(氣息)』に『cf. Philo,
 de act. mundi 21, Nestle in Zeller 816n., Vlastos St. in Pres.
 Philos. I 425, West 150, Bollack-Wismann 'Souffle', Kahn
 139, 239.
- (19) *op. cit.*, p. 251, cf. p. 239.

(ホラック・ヴィスマン)『ギリシア哲学』早稲田大学専任講師